
麻帆良に輝く光さす道

J・フロスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麻帆良に輝く光さす道

【Nコード】

N5536Z

【作者名】

J・フロスト

【あらすじ】

不動遊星は平和な時を過ごしていたが、ある事件がきっかけで麻帆良学園にとばされてしまう。その世界では、魔法が存在するという世界だった。

遊星は3-Aの副担任となり、ネオドミノシティに帰る方法を探すが……

チーム5D's、ネギ・スプリングフィールド、3-A生徒たちはこの世界を舞台に闇の力との戦いが始まっていく……

*この小説は遊戯王5D'sと魔法先生ネギま!!のクロスオーバー

―小説です、
不定期更新、駄文ですが見ていってください。

第1話 謎の旧モーメント襲撃者（前書き）

ネオドミノシティ編です

誤字・脱字等の指摘でもいいので、感想待っています。

少し遊戯王5D'sの設定をぶち壊しているかもしれません。

第1話 謎の旧モーメント襲撃者

視点 遊星

俺たちがイリアステルから……

ゾーン Z - ONEとのネオドミノシティを守るための決闘から数日^{デュエル}

平和な時をネオドミノシティは過ごしている。

シティは元の姿を取り戻しつつあり、さらに発展しようとしている。

俺たちはWRGPで優勝したが^{ワールドライティングデュエルグランプリ}

それに甘んじず、D・ホイールの改造とゾーンZONEたちの世界

……破滅の未来を避けるための方法を考えている。

チーム5D'sのメンバーもそれぞれの日常に戻り^{ファイブディーズ}

今を進み、未来への道を進んでいる。

俺は今日もD・ホイールの改造にいそしんでいるが……

「うむ！ やはりピリ辛レッドデーモンズヌードルは最高だー！」

ジャック……最近カップヌードルをたべすぎじゃないか？まあ、
いいか。

もう昼か、俺も今日の昼食はカップラーメンにしよう
ずっとこの平和が続いていけばいいんだがな……

t r u u u u u u u u u u …… t r u u u u u u u u u u ……

ん？ 電話か、誰からだ？

「遊星、俺が出る。」

「ちょうどカップラーメンを食べ終えたところだからな」

「ああ、任せたジャック、もしネオドミノシティを救った英雄を取
材したいとかだったら断ってくれ」

目立つのはあまり好きじゃないからな。

「まかせておけ、…もしもし？…ん？ なんだ、牛尾か、何？

遊星！！ D・ホイールの牛尾との通信を入れる！！

セキュリティからだ、何か厄介なことが起こったらしい」

「牛尾が？ ああ、わかった」

D・ホイールの牛尾との通信回線をONにする。

何の用なんだろうか……

「ん？ おお！！ つながった！

またD・ホイールの改造でもしていたのか？

まったくよお、いつもお前は……」

「牛尾、それでいったい何の用なんだ？

わざわざ電話までしてきたんだ。

それなりに重大な頼みごとなんじゃないのか？」

「ああ、そうなんだ

一つ聞くが…… そっちはお前とジャックだけしかいねえのか？」

「そうだが…… クロウかアキに用があったのか？

クロウは今、配達に行っているし

平日の昼間だから、アキは今、デュエル・アカデミアで授業だと思っが……」

牛尾……なぜそんな深刻そうな顔をしている？

「いや、それなら後でお前から連絡を入れてほしい、できればシグナー全員、龍亞と龍可ちゃんにも頼む

もしかしたら…… いや、おそらくダークシグナーが復活したかもしれない」

牛尾のその言葉に俺とジャックは言葉を失った、ジャックはその後D・ホイールをたたきながら叫んだ。

「どういうことなのだ！！ 牛尾！！ 今きさまはどこにいる！！」

ジャックの言うとおりだ！ どういうことなんだ！

ダークシグナーが復活したというのなら一大事じゃないか！！

「今そいつは旧モーメント内部にいるんだが……」

何が目的なのか、何のつもりなのか、まったくわからない。

襲撃を受けてこっちも被害を受けているんだ…… こっちにきてくれないか？」

「ああ、わかった、できるだけ早く行くから待ってる！！」

そう言い、俺は牛尾との通信を切る。

「ジャック！ 行くぞ！ 旧モーメントへ！！」

「言われるまでもないわ！ デュエルディスク 決闘盤だ！

受け取れ！ 遊星！」

ジャックから決闘盤デュエルディスクを投げ渡され、Dーホイールにセットする。
ジャックも決闘盤デュエルディスクをDーホイールにセットした。
ダークシグナー復活したとしたら、この町を破壊なんてさせやしない！

そう胸に思い、俺はDーホイールを旧モーメントに向けて走らせた。

……さて、クロウと連絡をとるか…
アキ達デュエル・アカデミア組は連絡が取れないだろうだろうか
な。

クロウのDホールと連絡つと

「…ん？ 遊星じゃねえか！？ どうしたんだ？

こっちは配達が早く終わったからそっちに帰ってメシにしよう

おもったのによお」

「クロウ、今どこらへんを走っている？」

「どこらへんって言われてもなあ…」

「そうだな、デュエル・アカデミアの近くって言えば分かりやすいか？」

「…そういや今日は、午前授業だって昨日龍亞が言ってたような…アキ達を乗せてそっちに向かおうか？」

「連絡とってくるってことは何か厄介な事でも起きたんだろ？」

「ならクロウ！！ アキ達を連れて旧モーメントに向かってくれ！！」

「旧モーメントお？」

「なんでまた？」

「さっき牛尾から連絡があつてな…」

「ダークシグナーらしき奴に旧モーメントが襲撃されたらしい」

「なんだつてえ！？」

「大変じゃねえか！？ もしまたゼロ・リバーズなんか起こされたら…！！」

「ああ、そんなことになったらやっといリアステルから守った俺たちの町が破滅へと向かう」

「だからなんとしてでも阻止しなければならない！！俺とジャックは先に旧モーメントに向かう！！」

「わかったぜ遊星、だが……死ぬんじゃないぞ!？」

「大丈夫だ」

そう言い、俺はクロウとの通信を切った。

さて、もうすぐ旧モーメントか……

全速力でとばしたからか、思ったよりも早く着いたな……

旧モーメントに着いたのはいいが……

……ひどいな、これは。

「うっ……」「痛えよお……」

「セキュリティの奴らの負傷者が多いな……」

牛尾の奴は大丈夫なのか…… 少し心配になってきたな

まあ、連絡をしているだけ、無事だと思うが」

確かに…… ここには負傷者が集められているのか？
テント等で治療を受けている。

見たところ負傷者は10人から15人ぐらいいるようだが
ん？ あのテントから見えるのは……

「遊星、来たか、ちょっとこっちに来てくれ」

あのテントから見えたのは…… 牛尾か、こっちに向けて手をこまね
いている

どうやらあのテントの中で話をしようとのことらしい。

「来てくれてすまないな、遊星、ジャック、協力感謝する」

「ふん、何をいまさら言うのだ」 「俺たちにまかせてくれ」

「すまねえ……現状をせつめいする

お前たちと連絡を取る前に実は血の気が多い奴らが命令を無視して
襲撃者を拘束するために強行突破をしかけたんだよ

しかし…… 結果はさっき見たような状況になっちまってな、あれは
俺の責任だ

だが俺は部下たちを助けるときにな、顔を見ちゃあいねえんだが
そいつのすがたはみたんだよ」

「どういう奴らだったのだ？」

「いや、おそらく単独犯だろう、監視カメラには一人しか映ってい
なかったからな、

そいつは…… 黒いフード付きの服を着てて、ところどころに紫色

ののラインがあった。

……そしてきわめつけに、右手のに何のだからはわからなかったが紫色に光る痣みてえなのがあった」

そいつはほぼダークシグナーだな、確定とはいかないが……
そもそも、何が目的で襲撃なんかをしたんだ？

「ふん！　そこまでわかれば十分だ！

地縛神やダークシグナーがなぜまた復活したのかは知らん！！

だがこのジャック・アトラスが全てこの力によって粉碎してくれるわ！！

行くぞ、遊星」

確かに地縛神やダークシグナーは俺たちシグナーがすべて倒し、

地縛神は封印されたか消滅でもしたはずだ……

……まさかとは思うが、スカールレッド・ノヴァのような生き残りのようなやつがいたのか？

考えているうちにジャックはテントから出て行くこととする。

「まあ、待てジャック、まだ話は終わってねえ

それで負傷者ができたりした訳なんだが……

デュエルモンスターのカードが実体化し、俺達を襲ったと怯えた様子で俺に話した奴がいるんだ、ここまで言えばわかるだろ？」

「相手は……サイコデュエリストということなのか？」

ジャックの足が止まり、牛尾に問いかけた

しかし……カードの実体化とは……

「ああ、おそらくそうだ

あいつの怯えようからして嘘は言ってねえ

あれだけの負傷者ができちまったっていうのも、一つの証拠だ

それにこの旧モーメントはセキュリティの保護下にあつて

嚴重な警備で守っていたっていうのに、……それがたやすく蹴散らされてる

もしそうだとしたなら、かなり強力な奴だろうな」

牛尾がジャックの問いかけに答える

サイコデュエリストか…厄介だな

……アキ達が来るのを待つか？

「遊星！！ きさまもいつまで黙ったままでいる！！

わけのわからぬ奴がまたゼロ・リバーズを引き起こすのかもしれないのだぞ！！

きさまはそれでもいいのか！！」

ジャックが俺のむなぐらをつかみ、語りかける

……たしかにジャックの言うとおり今すぐに行動するのも一理ある
それならば……

俺はジャックの手を払いのけた。

「そうだな、行くぞ、ジャック、旧モーメントに

牛尾、クロウ達が来たら俺たち二人は先に行つたと伝えといてくれないか？」

「…わかつたよ遊星、すまねえな

俺たちセキュリティは役立たずだ……」

「そんなことはないさ、俺たちは俺たちで、
牛尾たちは牛尾たちでこの町のためにやれることを一つずつやっていくだけさ」

牛尾にそう言いテントから出ると、Dーホイールに乗り俺たちは旧モーメントに向けて走り出した。

第1話 謎の旧モーメント襲撃者（後書き）

他の作者様の小説を見て自分も書きたいと思いましたが……
自分の文才のなさに驚きますね

すごいなあ、10000文字だとか一話に入れてる人とか、
俺にはそんなの無理だって思い知りましたよ。

ネギま！！世界へはあと2〜3話ぐらいで行きます。

第2話 復讐のサイコデューエリスト！！（前書き）

第2話です。

地縛神だとかに独自設定を組み込みすぎですかね？

第2話 復讐のサイコデュエリスト！！

視点 クロウ

…さて、デュエル・アカデミアに着いたか…
アキ、龍亞、龍可を探さなねえとな
しかし、人気がなさすぎる。

…ひょっとしてもうみんな家にかえっちまってるのか？
だぁー！！ めんどくせえ！！
いそがなきゃならねってのによ！！

「あら、クロウ、もしかしてデュエル・アカデミアに何か届け物？」
後ろから声をかけられ、振り返ると
探していた張本人チーム5D's ファイブデイズメンバー、龍亞、龍可、そしてD
ーホイールに乗っている十六夜アキがいた。

「クロウ、みんなもうとつくに下校しちゃってるし、校舎内にもう
先生はいないはずだし、もう来たところで遅いと思うよ？」

「そんなんだつたらなんで私たちは今さら校舎から出てきているの
よ……」

確か誰かさんが教室にデツキを置き忘れたからじゃなかったっけ？
戻る為にわざわざアキさんのDーホイールにも乗せてもらってるっ
ていつのに……」

「う……」

そ、それは……」

「ふふっ」

まったく、龍亞は相変わらず龍可には頭が上がらないねえなあ
ってなごんでる余裕なんて無かったんだった！

「アキ！！ 龍可！ 龍亞！んな事より大変なんだ！さっき遊星から連絡が来たんだが
ダークシグナー復活したかも入れないかもしれないって言うんだ
！！！」

「ええっ！！」 「どういふことなのクロウ！！」

「どういふことってのは俺が聞いてえぐらいなんだよ！
ともかく龍亞！俺のブラックバードに乗れ！
アキは龍可を乗せてついてきてくれ！
走りながら説明する！」

そう言い俺は今ハイウェイを經由しながら旧モーメントを目指して
Dーホイールを走らせている。

「……ってなわけだよ
旧モーメントに遊星とジャックは先に行ったんだ」

そして説明を終えたが
三人とも不安そうな表情でいる
……無理もねえか

「ねえ、クロウ、アキさん
私、いやな予感がするの

襲われた場所だって旧モーメントなんですよ？
だったらなおさら……」

「……私も龍可に同じくいやな予感がするわ
遊星たち……大丈夫なのかしら」

いやな予感が……

正直いって、俺もそんな感じがする
赤き龍の痣が伝えてくれてんのか？

「そういうときこそ

仲間を、絆を信じるべきだって遊星はいうじゃないか！
なーに、俺だって新しくシグナーになったんだ！
ダークシグナーなんて楽勝だって！」

遊星なら……か

確かにそういういそうだな……なら！

「アキ、もつとスピードを上げるぜ、早く旧モーメントに行きてえ
ついてこれそうか？」

「たぶん、大丈夫よ」

そう言い、俺はブラックバードのスピードを上げた。

旧モーメント

視点 遊星

もう旧モーメントの光がみえる
ここまでジャックとともに来たが……静かすぎる
襲撃者の姿もまだ見ていない。

旧モーメントが目と鼻の先のところまでできてしまった
Dーホイールを止め降りるが……

「だれもいないではないか！
襲撃者はどこだ！！」

確かに……
外にはセキュリティがいるから見つかったら連絡が来るはずだ
逃げたというのではないと思うが……

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ……

拍手のような音が俺たちが入ってきたほうから聞こえたので
俺とジャックは振り返る。

視線の先にはダークシグナーの着ていた服と全く同じデザインの服
を着ている
だが、フードのせいで顔がよくわからない。

「きさまか！！ この旧モーメントを襲った奴というのは！！！」

「その通りだよ

ようこそ、不動遊星

そして…… はじめましてだね、ジャック・アトラス」

なぜだ…？

俺はこの声を聞いたことがあるような気がする

そして…… ジャックにだけはじめてましてということは俺とは会ったことがあるのか？

「きさまあ！！ いったい何者だ！！

そのフードをとり、顔をこちらに見せろ！！」

「やれやれ、まだ私だとわかっていないようだね、不動遊星

ならいいだろう、ご期待に答えてフードをとってやるうじゃないか」

謎の襲撃者がフードをとる

！！ 奴は！！

「私の名はディヴァイン

今は無きアルカディアムーヴメントの総帥さ」

くっ！ 奴が襲撃者だったのか！

だが、奴は……

それにダークシグナーとしてよみがえったにしても目の白目の部分が黒くなっていない！

いったいどうなっている！！

「お前はたしか地縛神 コカライア C c a r a y h u a に飲み込まれ

死んだんじゃ……」

「確かに飲み込まれたさ、そして今ここにいる…」

だが死んだというのはいよいよほしいね、私は私だ

それに飲み込まれたからといって、死んだのではないさ

そうだな…… 取り込まれた、というのが正しいのかな？」

「遊星！！ アルカディアムーヴメントというのはたしか十六夜がいたところだったな

ということとは奴は…」

「ああ、奴はサイコデュエリストだ……」

それも強力な方に入る、奴ならばセキュリティをあしらうこともおそらくできるだろう

だが奴は… それに、地縛神は消滅したはずだ」

「まだ奴らは消滅したのではなく

君たちシグナーへの復讐を果たすその時のために、力を奴らはたくわえているのだよ」

っ！！だとしても納得できない！

シグナーとダークシグナーの戦いは5000年周期だったはずだ！

「二人とも、納得できていないご様子だ…… 語ってやるとしよう

確かに私は地縛神 コカライア Carolina に飲み込まれた…

そして、地縛神と共に私の肉体・魂は封印されてしまったが…

私の世界への、君たちへの憎しみ、怒り、復讐心があのだ地縛神に力を与えたのさ

それに、世界で何か大きな出来事が起きたのではないかな？

人々の心が欲望、悲しみ、絶望といったマイナスのエネルギーを

大いに

この世界に蔓延させた……

そのような出来事が起きているんだ

闇の存在たる地縛神に復活の機会を与えてしまっていたのさ」

大きな出来事とは……アーククレイドルの落下の事件か！

「まあ、一時的だったようだが……

さまざまな幸運が重なり、私はよみがえったのさ

だが……一番の幸運は、地縛神がまだ弱っていたということかな？」

「どういう意味だ！！ダイヴァイン！」

「簡単なことさ、私の心は、地縛神を超えたのさ

取り込まれていたが、奴の力はすべて私のものとなった！

つまり私は、神の力を手に入れたということさ、

この力によって自らの目的を果たす時が来た！」

すさまじい闇の力が心にまで伝わってくる！

だが……ここは逃げるわけにはいかない！

赤き龍の痣が輝く……俺に力を貸してくれている！

「決闘だ！^{デュエル}ダイヴァイン！！

俺たちがきさまの野望を阻止する！！」

「その通りだ！

さつきから聞いていれば神の力を手に入れただと？

人であるということ捨てたようなものではないか！！

人であるからこそ、前へと進めるのだ！

キユウウウウウウン

今の音はおそらく強制的に停止することに成功したか！？

煙が晴れていく……

ジャックの姿が見えたがどうも様子がおかしい。

「…ぐっ、遊…星…きさま…無事…か？」

よく見るとジャックの身体から数本の煙が立ち、足はふらついており手からは赤い液体が……

ジャック……お前まさか！！

「ジャック！！お前さっきのファイヤー・ボールを俺の身代わりになっけて受けたのか！？」

くっ！！ ジャック……すまない！！

「旧モーメントが……停止している！？

おのれえ、不動遊星！！

やはりきさまは私にとって邪魔な存在だ！！」

ダイヴァインは新たなカードを取りだし攻撃の準備をするが……

このままではまずい！

ジャックも負傷しているし

いつまでも避けられるわけじゃない！

「死ね！！ 不動遊星！！

魔法カード……」

ウイイイイイン……！！！！

音に気づき振り返るが……！！

旧モーメントが、また起動している！？

それと同時に赤き龍の痣も共鳴するように輝いている……

これは一体！？

旧モーメントのなのか、赤き龍の痣ののかは分からないが

光が俺とジャック、デイヴァインを包みこむように輝き、

その眩しさに俺は目を閉じた。

第2話 復讐のサイコデューエリスト!! (後書き)

次話はネギま!世界にいきます。
感想待ってます。

第3話 見知らぬ世界とバトルモード（前書き）

今日中に執筆出来た！！

ああ〜ストックがなくなる

今回の話の内容はいろいろと詰め込んでいる気がするのですが、あとがきにツッコミを入れられそうな部分に解説をいれておきます。

第3話 見知らぬ世界とバトルモード

視点 遊星

俺が目を開けると、周りは黒一面しかない世界にいた。
ジャックもデイヴァインすらもない。

寂しさや、空しさ、悲しみといった

負の感情がことごとく心に流れ込んできている感じがする

ここは…闇の世界なんだろうか？ それとも……

しかし……俺はなぜこんなところにいるんだ？

あのまま旧モーメントは暴走し、町は破滅へ向かったんだらうか…

そして俺は……死んだ？

ここが闇の世界ではなく死後の世界だとしたら……少し寂しいな。

周りを見回したところで何も無い。

そんな世界だからな……ここは

そして、赤き龍の痣が、再び強く輝きだし、目を閉じる。

目を開けると……木がうつそうと生い茂っている森にいた。

冷たい風と雲一つない空に月が輝いている。

そして一番目に付くのがあの巨大な木だな、少し遠いが、ここから
でもかなり巨大だということがわかる。

あんなものは見たことがない……ネオドミノシティのモニュメント
よりもでかいんじゃないのか？

それはともかく、俺はこんな場所を知らない。

さて、どうしたものか……

俺が今持っているものは、右手にあるこの決闘盤とセットしている
デッキぐらいしかない。

ここがどこだかまったくわからない、少し歩いて情報をおつめるほ
かないな。

仲間たちも同じような状況にあっているんだろうか……

だったらジャックが一番心配だな、あの性格だし、なによりも重傷
を負っている。

……すぐ近くに、俺のDーホイールが倒れている状態であった。

俺と一緒にこの近くに転移したのか？

ともかく足となる手段を手に入れるのはとてもラッキーだ。

Dーホイールを起動させるが……

いつもよりもかなり調子が悪い、スピードも最高速度の4分の1ぐ
らいしか出ない程度だ。

おそらく原因はモーメントエンジンの回転率だろう

モーメントという言葉で気づいたが、デュエルディスク決闘盤のモーメントの調子も
悪い

ソリットビジョンにはさしつかえが無いとは思って……

さて……Dーホイールのナビでここがどこだかわかるかな？

わずかに期待したが、画面に表示されたのは

『現在地・不明』だった、強い風が笑っているかのように吹く
仕方ない、風任せに進むとするか。

まだ森を脱出できないか……ん？

森の奥が少し騒がしいな……

！！ あれは！！

「神鳴流奥義……斬岩剣！！」

1人の制服を着た黒髪の少女が刀を持って2体の悪魔と戦っていた、
しかし……あの悪魔を俺は知っている。
正確には、悪魔族モンスターなんだが。

1体は両腕がランスになっていて、鎧と兜を身に着けているモンス
ター、ランサー・デーモン
もう1体は胴体の部分が口のようになっており、その部分に頭蓋骨
がある

赤毛の悪魔……マッド・デーモン

どちらもデュエルモンスターのカードのモンスターだ

しかし……実体化している！！

なぜモンスターが実体化しているんだ？あれもディヴァインの仕業

なんだろうか……

ともかく、2対1だ、押されているようだから、あのままではあの少女は殺されてしまうだろう、助けないとな。

俺はDーホイールの今出せる全力のスピードでマッド・デーモンに体当たりをした。

マッド・デーモンは木にたたきつけられ、動かない

……これは交通事故に近いんじゃないのか？

そう思うと、少しマッド・デーモンに罪悪感が出てくるな。

「大丈夫か？」

「あなたは何者ですか？」

「とりあえず、味方さ、さがっている」

ランサー・デーモンがうろたえているような動きをしている……

おそらくマッド・デーモンが突然やられたので驚いているんだろう。いったんさっきの黒髪の少女を乗せて逃げるといふ手段もあったが

……不安だ。

いつ急停止したりするかもわからないからな。

それに相手はランサー・デーモン……ならば！

デュエルディスク 決闘盤を右手にセットし、デッキに手をかけるが……

突然俺のドラゴンヘッドの痣が輝き、その光をデュエルディスク決闘盤とデッキがそれを吸収するような形となった。

……どうということだ？

デュエルディスク 【決闘盤、バトルモードに移行、起動します】

なっ！？ バトルモードだと！？

！？ 俺の体が勝手に動く！？ 痣の力か！？
俺の意思とは全く関係なく5枚のカードをドローすると、デッキの一番上のカードがドローしやすいようにか、少し飛び出ている。
……こんな機能なんて俺はつけた覚え全くないぞ！？

勝手に俺の左手がカードをドローすると、1枚のモンスターカードを召喚するように決闘盤に置いた。
デュエルディスク

すると、白い装甲つけ呼吸器のようなものをつけた戦士……
スピード・ウォリアーが現れた。

しかしこのスピード・ウォリアー……実体化している？

俺はサイコデュエリストじゃないんだが…… まさかさっきの光によってか！？

スピード・ウォリアーは身体から青い闘志みたいなものを出すと、素早くランサー・デーモンに近づくと

開脚蹴り……ソニック・エッジをくらわせ、ランサー・デーモンを消滅させた。

しかし、先ほどおれがDーホイールで体当たりしたマッド・デーモンがいつからか目を覚ましており

後ろからスピード・ウォリアーを殴り、消滅させた。

ぐっ……！？ スピード・ウォリアーが破壊されるのと同時に俺に衝撃が伝わってきただと！？

……まずいな、さっきの体当たりで怒り狂っている、マッド・デーモンはこちらを睨みつけているからな。

すると、俺に向けて胴体にある頭蓋骨をかみ砕き、それをこちらに飛ばしてきたじゃないか！！

だが、俺の手は1枚のカードをセットし、それを発動させていた。

目の前にくず鉄で出来た案山子が現れ、マッド・デーモンの攻撃を
防いでいる……

これはくず鉄のかかしを発動させているのか……

しかし……罫カードは伏せたターンには普通使えないはずなんだが

……

まあ、使えているんだから気にしないでおう。デッキの一番上の
カードがまた少し飛び出たのでドローすると、身体が自由に動ける
ようになった。

後は自分自身で戦え…… そう言いたいんだな？ ドラゴンヘッド……
ともかく、俺は先ほどドローしたカードを召喚した。

「こい！ ジャンク・シンクロン！」

そして、その能力によってよみがえれ！ スピード・ウォリアー
！」

ジャンク・シンクロンが手をかざすと不思議な穴のようなところか
らスピード・ウォリアーが飛び出した。

そして守備の体制をとる……ここらへんは決闘デュエルと同じか……
なら……アイツを出すか

「スピード・ウォリアーに、ジャンク・シンクロンをチューニング
！」

ジャンク・ウォリアーをシンクロ召喚し、一気に叩く！

ジャンク・シンクロンが身体についているエンジンを引き、3つの
輪となりスピード・ウォリアーを包みこみ、ジャンク・ウォリアー
となったが……

元の素材2体に分かれてしまったと！？

このバトルモードというのは、シンクロモンスターは出すことが

できないのか!?

うろたえていると、マッド・デーモンがスピード・ウォリアーを攻撃し、破壊された。

くっ……先ほどまでとはいかないが少しきついな……
だが、守備表示ならダメージは軽減できるといふことが……
……しまった、くず鉄のかかしを使っておくべきだった……
シンクロができなかったからか、少し焦ったな

「なら……ジャンク・シンクロン!

マッド・デーモンに攻撃しろ! ジャンク・スプラッシュー!」

ジャンク・シンクロンが号令のようなことをすると、どこからともなくポルトの雨がマッド・デーモンを襲い、破壊した。

やったか……

安心感からか、俺は両膝を地面につけ、倒れる。

なんだか目の前がグニャグニャするような感じがする……

そういえば昼も食べていなかったな……

俺は安心感と空腹、そしてダメージによる疲労でその場に倒れた。

視点 黒髪の少女

っ!! まだ身体にダメージが残ってる……

さすがに5体も相手にしたのはきつかった……龍宮を呼ばずに一人で向かったのは失敗のようですね……
まあ、3体は切り捨てたんですが。

しかし……さっきの人は大丈夫なんだろうか？

さがつてると言ったので一旦退いておいたのはいいんですが……

あの5体は私がいままで相手をしていった鬼だとかとは違う。

そう、あれは……悪魔

あの魔法先生はそんなの相手にしたことあるんでしょうか？

木乃香お嬢様以外の魔法関係者だったら別にいいんですけどね。

けど……まあ、助けてもらったわけですし……

……助ける方法は少しアレでしたが。

戻ってみますか

そういえば……あんな魔法先生の中にいたっけ？

あまり交流を持たないのも少し問題かもしれませんね。

戻ってみましたが……

オレンジ色のキャップを被ったこびとのようなのが号令をかけるかのように天を指さしていた。

「なら……ジャンク・シンクロン！

マッド・デーモンに攻撃しろ！ ジャンク・スプラッシュユー！！」

その言葉の後、ねじがいつぱい赤い悪魔に向けて降っていった！？
そして悪魔を消滅させる……

「うっ……」

「つて！倒れた！？ さっきの変な小人みたいなのも消滅していく……え」と、とりあえず誰かを呼ばないと……

ふと、私は右手につけられている機械についている1枚の物いや、カードに気が付いた。

「ジャンク・シンクロン??」

そのカードには、さっきの変な小人みたくのが描かれていた。

これらを使役させて戦っていたのかな？

召喚術はどちらかという和西が使うもの

と、いうことはこの人は西が麻帆良学園によこした人？

襲撃したりするならわざわざ私を助ける意味はないはず

ならこの人はいったい……??

私にはわかりかねますね、高畑先生を呼んで学園長の指示を仰ぎましょう

とりあえず式神を呼んでおけば場所はわからなくならないし、監視にもなる。

まずはそれからとしましょう。

第3話 見知らぬ世界とバトルモード（後書き）

黒髪の少女は神鳴流の時点でわかるとお思いですが桜咲刹那です。

桜咲が切り捨てた3体の悪魔？

それについては気にされると俺が困ります、というか桜咲がマッド・デーモンとランサー・デーモン相手に苦戦するというのが想像しづらいというのも一つの原因ですが。

シンクロ召喚が出来ない理由としては

シンクロにはモーメントの力が必要という独自設定が俺の中であり
ます

赤き龍の力によって遊星の決闘盤のモーメントがわずかながらに動いているという考えになっているんです。

だからシンクロができない……という感じをお願いします

ジャンク・シンクロンの攻撃？

漫画版5D's 第二話を見てください。

ちなみに攻撃力だけでバトルに勝つというのはこの作品では捨ててくれるとうれしいです。

貫通能力はほぼ無意味です、そのモンスターが受けたダメージが軽減されてコントローラーに伝わるといふものなので……

設定＋バトルモード解説（前書き）

サブタイトル通り、設定です
追加されて増えるかもしれません

12/28 デュエルモンスターズについて 追加

設定 + バトルモード解説

・バトルモード

赤き龍の力によって遊星たちの決闘盤が進化したもの

デュエルディスク

モンスターを実体化させることができ、それを行使させることが出来る。

モンスターが受けたダメージはある程度軽減され、コントロールしているプレイヤーに伝わる

カード効果は一部変更されているものもあり、OCG効果、アニメ効果になっていたりするものもある。

畏カードは伏せた瞬間から発動することができる。

(くず鉄のかかしの効果によっての再セットは次のドローまで使えない)

守備表示モンスターが破壊された場合のダメージは攻撃表示時よりも小さい

・リセットシステム

墓地に落ちた、除外されたカードをすべてデッキに戻し、新たに5枚ドローするが

10分ほどのリロードがかかる(デッキはその間消滅する。しかし、手札は残る)

デッキがリロードされた場合、手札はデッキに戻り、新たに五枚ドローする

・バトルシステム

ドローしてから次のドローするまで（次のドロー準備までは約2分とする）を1ターンとする

1ターン内にモンスターは1体しか通常召喚出来ない

ライフポイント⇨精神力とする

守備表示モンスターが破壊される場合、攻撃表示時よりもコントロールラーへのダメージは軽減される

貫通能力はこのバトル方式では関係ないものとする

シンクロ召喚はモーメントの力を十二分に使い、行えるものとしてるので遊星一人ではシンクロ召喚することは出来ない。

赤き龍の力によって、モーメントはその回転率を上げる。

・デュエルモンスターズについて

ネギま！世界では現時点でシンクロモンスター・チューナーは存在していない

エクシーズモンスターはすでに販売されている
（カゲトカゲ？ガガマジシャン？何それ？）

第4話 学園長との対談

視点 遊星

ここは……真っ白い場所だ……おそらく最初にZ・ONE^{ソーン}とあった場所に酷似している……

『遊星……不動遊星……』

どこからともなく俺を呼ぶような声がした、この機械的な声は……Z・ONE^{ソーン}か!?

「Z・ONE^{ソーン}!? いるのなら返事をしてくれ!」

『すみません……私はまだそちらに行くこともできそうにないようです、遊星、あなたのシグナーとしての力と絆によってその世界を……闇から……守って……ください……』

「Z・ONE^{ソーン}!? 待ってくれ!この世界とはどういう意味だ!?
Z・ONE^{ソーン}!!」

「つつ……どこなんだ……ここは?」

目を覚ますと、薬のような匂いがする場所にいた。

白いふとんかけられていたところを見ると、さっきまで俺はベット

で眠っていたらしい

「やあ、目を覚ましたようだね」

声が出たので振り向くと、白いスーツを着ていて、メガネをかけた男性がいた。

「混乱しているところ悪いけど、自己紹介させてもらおうよ

僕の名は高畑・T・タカミチ、一応教師をしている、君の名は？」

「俺は……不動遊星といいます、すみませんがタカミチさん、聞きたいことがあるのですが」

「うん？ 何だい？」

「ここは一体どこなんでしょう？ それとどちらの方角にネオドミノシティがあるかご存知でしょうか？」

「ここは麻帆良学園の保健室だよ、森で倒れた君はここまで連れてこられたんだ、でも…ネオドミノシティ？ そんな場所を僕は聞いたことも見たこともないよ？」

ネオドミノシティを知らない？ そして俺も麻帆良学園なんて聞いたことがない、さっきの夢でZ・ONE^{ゾーン}が言っていたこの世界を闇から守ってくれという言葉、つまりこの場所、この世界は……

「ど、どうしたんだい！？ 急に考えこんで

考えているところ悪いけど、僕からも一つ質問をさせてもらってもいいかな？

不動君、君は…いつたい何者なんだい？」

低い声で、こちらを威圧するように語りかけてくる、しかたない、信じてもらえるかもわからないし、そもそも憶測に近いからな…

「信じてもらえるかわかりませんが、俺はこの世界とは別の世界…
…異世界から来ました」

「それは…本気で言っているのかい？」

「はい、ですがそれを証明できるものといつても…

そうだ、俺が身に着けていた機械とDーホイール…いや、バイクを詳しく見てももらえればわかると思います、あれの動力に使われているものは、おそらくこの世界には存在しないものだと思います」

「うーん、とりあえず君のことは僕一人で決めていいことじゃないさそうだね

さっき言ったと思うけど、僕はこの学園で教師をしているからね、学園長と話をしてもらえるかな？

さっき言っていた機械とやらも持ってきておくから、話も僕から通しておくよ」

「すみません、ありがとうございます」

「だったら…少し時間がかかるね、教職員用の余った弁当がいまここにあるから、それでも食べて待っているといいよ」

そう言い、弁当を手渡されると、タカミチさんは保健室から出て行った。

麻帆良学園か…Z・^{ゾーン}ONE、俺はこの世界で何をやっていけばいいんだ？

とりあえず、今は弁当を食べてタカミチさんを待つとしよう。

弁当も食べ終えてしまって、結構暇になってしまったな……
赤き龍の痣を見るが、まったく変化する予兆などない、ただただ時間
間が過ぎていくだけだ。

「遊星君、学園長が会ってくれるから、これから学園長室に向かおう」

「わかりました、向かいましょう」

学園長室に向かっているが……相当の広さだな、この学園デュエル・アカデミアよりも広いんじゃないのか？

俺は学校なんて行ったこともないからな……新鮮な雰囲気だ。

そういえば、あの時戦っていた少女は何者だったんだ？

制服を着ていたということはこの学園の生徒だと思うが……

「ほら、ここが学園長室だよ、学園長、夜分遅くに失礼します」

タカミチさんがノックし、ドアを開ける。

奥にるのがこの学園の学園長だろう

だが……後頭部が不自然なくらい大きくないか？

「うむ、来たかタカミチ君、してもう一人の君が……」

「はい、不動遊星といいます」

「ふむ、座って話でもしよう

そこのソファでも座ってくれたまえ」

俺がソファに座ると、タカミチさんは学園長の横に着く完全に話をする体制になったな。

「まずは、自己紹介しよう

わしは近衛このえ近右門このえもんこの学園の長じゃ

さっそくじゃが不動君、君が異世界から来たというのは本当の事なのかね？」

「はい、証拠としては俺が身に付けていた機械とDーホイール…
いや、バイクを調べてもらえればわかると思います

今言った2つにはおそらくこの世界にはないテクノロジーを使っているはずですので」

「身に付けていていた機械とはこれの事か？

して、これはいつたいななんじゃ？ カードがついており、腕に着けるようなものじゃが

目撃者はこのカードに描かれていたのを実体化させ、戦っていたという報告があったんじゃがのう」

学園長が机から決闘盤デュエルディスクを取り出し、こちらに見せてくる。

モーメントの事は……言うべきではないな、この世界まで破滅へと向かうかもしれないしな。

「それは決闘盤デュエルディスクというもので、それにつけられているカード……俺たちの世界ではデュエルモンスターズをするときに使う道具のようなものです」

「ああ、そつえば見たことがあるようなカードだと思つたら……」

「ふお！？ 高畑君はこのカードについて知っているのかね？」

「今大流行しているカードゲームの一種ですよ……この前これで遊んでいる生徒がいました

さすがに機械まで使ってはいませんでした」

なるほど、この世界でもデュエルモンスターズは存在するのか。

「不動君、できればその機械を使ってくれんかね？」

そのカードの実体化というのを見せてほしいんじゃないか？」

「わかりました、では……出てこい！！ スピード・ウォリアー！！」

俺は決闘盤を左手にセットし、スピード・ウォリアーを出した。

やはりソリットビジョンは存在していないのだろうか？

二人ともびっくりした様子でこちらを見ている

「ほう、すごい科学技術じゃのう……」

「たしかにそうですね、僕も見たことがないです、

おそらくうちのロボット工学研究会の技術よりもすごいものなんじゃないでしょうか

しかし……そうになると彼は……」

「異世界人、というのを認めざる得んことになるのう

不動君、バイクの方は外に止めてある

そちらの方もみせてくれんかのう

高畑君、案内の方は君に任せる」

「わかりました、俺も故障しているかなど確かめたいので」

そう言い、タカミチさんの案内のもと、学園長室を出た。

「ところでどうやってこの世界に来たというのかね？」

異世界から異世界への移動など、普通は無理のはずじゃとわしは思っんじゃが」

「俺も何故この世界に来たのかはわかりません、しかし、ここに来たこと、それには意味があり、やらなければならないことがあるのだと俺は思っています」

「なるほど、なるほど……」

「ところで話は変わりますが、この学園にあるあの大きな木は何なんでしょうか？」

「ずいぶん大きいようですが……」

「あれは生徒たちの間では世界樹と呼ばれていてね、この学園都市、麻帆良ができる当初からあったらしいよ」

「学園都市……確かにここは広そうですが……」

「ははは、確かに、小・中・高の学部がほとんど一つにまとまっているからね」

「確か…文科系の部活だけでも100を超えるぐらいの部活があるから」

いろいろと話しているうちに、外に出ており、赤いボディが特徴のバイクが見えた、あれは間違いなく俺のD1ホイールだな。

「まず先に、点検をさせてもらいます」

「ほうほうこれが君のバイクか君の世界ではこういうのがやっているのかね？」

「いえ、はやっているというよりは…このバイクのエンジンは知り合いの企業と協力して作ったものですが、それ以外の部分はすべて1からジャンクパーツなどから組み上げたものなので」

「ふお！？ これをすべて君一人で組み上げたのかね！？」

「さすがにジャンクパーツ集めは仲間が手伝ってくれましたが…ほとんど俺の手作りですよ」

「バイクを1から組み上げるって……僕はそんなことしてる人を見たことがないんだけど」

そうなのか？

技術とかさえ知っていれば誰でもできると思っただが……
サテライト時代はDーホイール作り以外他にほとんどすることがな
かったしな。

「とりあえず、一部を除いてですが、支障はありません」

「ふむ、ならば動かしてくれ」

Dーホイールのエンジンを俺はいれた。

「起動にも特に問題はなさそうだな……」

しかし、その直後Dーホイールは赤い光の粒子のようになり、分解
した。

そして一つに集まると、そこには1枚のカードが落ちていた。
タカミチさん、学園長も驚いているが、俺も何がどうなっているの
かさっぱりわからない。

とりあえず、落ちたカードを拾ってみるが、デュエルモンスターズ
のカードとは大きさはほぼ同じだが背表紙が全くの別物だ。

表には赤き龍の痣の絵、いや、正確にはドラゴンヘッドの痣だけが
描かれている。

それ以外は全くの白紙だ。

「それは…君のバイクの機能の一つかい？」

「いえ、こんな機能、俺はつけた覚えありません

このカードも俺は初めて見たものです

しかし……何故カードに変わったんだ？ 魔法みたいに」

「「!？」」

ん？二人が固まったような…気のせいかな？

「不動君…君がおそらく別次元の世界から来たということはよくわかった」

「じゃが…これから君は一体どうするのかね？」

「それは…」

「ふむ、とりあえず今日はもう遅い、これは教職員用の寮のカギじゃ今日はこの部屋で眠り、また明日、わしのところまで来なさい」

「すみません、今日のところはお言葉に甘えさせてもらいます」

学園長から鍵を手渡され、タカミチさんから寮の場所を聞き、歩きでそのまま寮へ向かった。

不動君の姿は見えなくなった、それにしても……彼の世界の技術はすごいものだったな……
あくまでも、この世界で考えてだけどね。
学園長はどうしようかと考えているようだけど……

「学園長、彼をじかに見てどうお思いでしょうか」

「少なくとも、悪いようには見えなかったのう、しかし……約半月前かの？」

「アレ」からおかしなことばかり続くのう、どう思つかね、高畑君」

「彼とそのことは関係あるかもしれませんが、彼をどうするかという目先の問題を解決すべきではないでしょうか？」

彼のバイクが変化して出てきたあのカード……あれは仮契約するバクティオーと出るカードと同じものはずですが」

あれはおそらく……いや、絶対にそうだった。彼のうるたえようからして多分あれが仮契約カードバクティオーだとは分かっていない。

でも……変わったカードだったな、龍の頭のようなものしか描かれていないなんて。

……その後彼の口から魔法という言葉が出たのは少し焦ったけど

「ふむ、そうじゃろうな、だから彼を野に解き放つわけにもいかんもうわしの中で彼をどうするかはすでに決めておるが」

え？もう決めているんだ、決断が早いな、ですが……なんでこっちを見るんですか！？」

「高畑君、仕事は増えるかもしれんが、給料は増やさんからの」

「はい？ えっと…：…どういう意味ですか？」

「彼を…：…2 - Aの副担任にする、一応、監視としての役目を高畑君、君にやってもらうからの」

とりあえず僕は思った。

しばらくの間、出張扱いで悠久の風の仕事はできないな、と。

第4話 学園長との対談（後書き）

あとがきツッコミコーナー

とりあえず書いておくべきものだとかはこれからこのコーナーにて報告します。

仮契約カードがデュエルモンスターのと同じ大きさ？

そういう設定です、あとあとで使うことになると思います

……明日菜・のどかとかのカードを装備魔法みたいに使うとか考えましたが……

チートだよなあと思い始めた最近。

学園長やタカミチが言っているアレって？

次話で出せるかな？

第5話 先生への誘い…そして、出会い（前書き）

ちなみに最初は三人称です、自分が書いたらどうなるのかという実験も兼ねています。

第5話 先生への誘い…そして、出会い

朝

遊星はいつもの服装のまま寝ていたところをインターフォンの音で目を覚ました。

ドアの小さな穴から自分をこの部屋に泊めさせてくれた人だと遊星は気付くと、ドアを開ける。

「やあ、遊星君、ぐっすりと眠れたかな？」

「ええ」

「そうか、それならよかった、ところで朝御飯を食べ終えたらまた学園長室に来てくれないかな？」

確か非常用に棚の中にレトルト食品だとかがあったはずだから朝御飯にはそれを食べてくれ

健康上身体に悪いから余り薦めることはしないけどね」

「わかりました」

遊星はそう言い、ドアを閉めると棚の中からカップヌードルヌードルを取りだし、冷蔵庫から好物のミルクを取り出し、飲みながら考える。

「（しかし……俺はこの世界でどうやって過ごしていくか…

宿無し程度ならサテライトで慣れているがDーホイールもカードに変わってしまったしな……）」

遊星はカップヌードルを食べ終わると寮を出て、魔帆良学園へと向かう。

「（それにしても夜だったからそんなに周りがわからなかったが……やはり広いな、しかし生徒をほとんど見ないのはどういうことだ？）」

疑問を自分へ投げかけつつ、学園長室へ遊星は向かった。

視点 近右衛門

ドアをノックする音が聞こえた、おそらくは不動君じゃろう。

「不動君かね？ 入りなさい」 「失礼します」

ちなみに学園長室の状況は昨日と同じじゃ、わしの横には高畑君もおる。

「して、昨晚の話の続きといこうかの、不動君、君はこの後どうするつもりでいるのかね？」

「とりあえず、お二人の世話にこれ以上なるわけにもいきません、今日・もしくは明日にはここを出て行こうと思います」

わしらに迷惑がかかるとでもおもったるのかのう、わしとしては、出て行かれることの方が困るんじゃないが。

魔法が世間にはれたりする可能性も否定が出来んからのう。

「だが、ここを出ても何がどうなるというわけでもないじゃろうに、君は、この世界の人間ではないんじゃない、家はもちろん、家族・仲間・知人もないし、どこかで住むとしてもこの世界では君はおそらくこの世界にはいないはずじゃ、それに、あのバイクに乗るとしても、免許もなくては警察に捕まるのがオチとは思わんかね？」

「ですが……」

ふむ、まよっとるのう。

そろそろ話を切り出すとするかの

「一つ手段がないこともない」「手段？」

わしは机の中から書類を取り出し、遊星君に見せる。

簡単に引き受けてくれるとわしとしてはありがたいんじゃないが…

「学園内整備士・及び数学教師 2 - A 副担任??」

どういう意味ですか、これは「

「なに、その書類に書いてある通りじゃ、わしは君に先生をやつてもらおうと思つ」

「整備士の方は引き受けたいぐらいです、しかし、俺には生徒を導

き、教えを説くなんてゆう資格などありません、それに、なぜ女子
中学部なんですか？俺は男性ですよ？」

何故暗くなるのじゃ？ 過去に何かがあった可能性が高いの。
もしくは女性が苦手か？

「心配いらん、教師の資格などこちらで偽造つくつてしまえばよい、そ
れに2 - Aの担任は高畑君じゃ、君の事情もしつとる」

「（遊星君がこつちを見てきたからうなずくしかないけど……学園
長、あなた黒すぎませんか！？」

追いつめてから一つの手段を出すなんて詐欺の常等手段ですよ……
それになんかさっきの作るも別の言葉に聞こえたし……）」

「いえ、確かに資格は必要ですが、俺は……捨て子というか……と
にかく施設の出みたいなものまで学校なんか行ったことすらほとんど
ないんです」

「ふお！？ 小学校すらか！？」

いや、それでも大丈夫じゃ、君はあのバイクを一人で組み立てて
しまうほどの頭脳と技術をもつとる

それにそのような事をするにあたって数学の知識は多少なりとも
必要になるはずじゃ、中学2年後期の数学ぐらいならばなんとかな
るとわしは思う

それでも不安というのならば最初の週は授業見学程度は許そうで
はないか

言っておくがこの話は君にとってメリットしかないんじゃないぞ？

住む場所としては昨日寝たあの寮の一室を与えるし、仕事だから
給料も出す、それに君が現れたのはここなんじゃ、君がなすべきこ
とはここにあるんじゃないかね？

しかし、むしろに君たちの世界の技術を提供してもらおうと、これが条件じゃ」

「（技術の提供はモーメント以外を言えば問題ない、だが、教師の方は……しかたない、背に腹はかえられないか」

沈黙が辺りを包みこむ、早く折れてくれるかの？　しばらくすると不動君はため息を吐き、決断した。

「わかりました、副担任・整備士の件、引き受けさせていただきますしかし、そこまで過度な期待はしないでください
そういえば、学校内の生徒が妙にこの学園の大きさに比べて少ないんですが……」

「ああ、それはこの学園が今冬休みには入っとなるからじゃ、今学園にしているのは運動部に一部のクラブ程度しか生徒はおらんじゃ
ちなみに明日が冬休み最終日じゃ、できれば新任の先生として君には始業式であいさつとかをしてもらおうことになる
数学の参考書などの教材は今日・明日中に届けるから安心しておれ
今日はもうこの学園の見学でもしたらどうかね？」

「わかりました、そうさせていただきます」

不動君はそういうと、校舎の見学に行った。

「学園長……よかったんですか？　あれで

そういえば不動君が住む場所ってネギ君が住む予定のばしょです

よね？ どうします？」

「言うな……高畑君、そのことについては
ネギ君の方は大丈夫じゃろ、なんとかなるて

とりあえず不動君には魔法を知ってもらわねばならぬの、あの力
ードの実体化は我々にとって戦力になりうるからのう

登校日初日の放課後に世界樹前の広場に魔法関係者を集めよう、
不動君を入れてな」

「わかりました、教師並びに生徒に連絡を入れます」

さて、これから忙しくなりそうじゃのう。

始業式当日

視点 遊星

もう始業式当日か……時が進むのが早いような気がする……

あの後俺は職員室で新任の先生だということであいさつをしに行っ
たり、食堂や、図書館島などの各所施設を回った。

しかしわかったことは……この学園、広すぎないか？

ほとんど暇な時間をかけたのに半分もまわれていなさそうだ……

とにかく俺は学園長から支給されたスーツを着、カバンに教科書類を入れて麻帆良学園に向かった。

始業式、朝の学年集会だな、生徒が集まってきたている途中見たことない先生がいるからだろうな、何度か生徒から視線を感じた。

今学園長があいさつをしているが……生徒たちは少し飽き始めているな

俺には経験がないが……龍亞が暇だといっていたのがわかる。

『これで学園長のお話を終了いたします』

次に、新しくこの麻帆良学園に就任される先生のあいさつです、不動遊星先生、台の上までお願いいたします』

ん、もう俺のあいさつまで来たか、台の上まで来てマイクを渡されるが……ここまで多くの生徒がいる中でのあいさつは少し緊張するな……

『初めまして、今日からこの学園でお世話になる不動遊星です』

授業の担当は数学、ちなみに2 - Aの副担任、学園内の整備士も兼任でやらさせていただきます

みなさん、これからよろしく頼む』

そう言い、俺は台から降りる。

その後、タカミチさんの案内のもと2 - Aに向かうが……

「不動君、さっきのあいさつ、なかなか良かったよ

それとこれが2 - Aのクラス名簿だよ、君に渡すから生徒たちの顔と名前を覚えてくれ」

そう言われ、名簿を渡されたので中を見てみるが……読み方がわからなかったり、留学生らしき生徒が幾人かいた。

ん？この15番の桜咲刹那って子、どこかで見たことがあるような

……

そうだ思い出した！！ あの日マッド・デーモンとランサー・デーモンと戦っていた！！

あの子もこのクラスなのか……

「ほら、ここが2-Aだよ、ささ、入って」

入ろうとしたが、不自然に少し教室のドアが開いていることに気づき、俺は足を止める。

上を見るとセツトされていた……真つ白な黒板消しが、そういえば、黒板消しの罫とかゆう罫カードがあったような……

それはいいとして入学初日から罫にかかり、スーツを汚したりするわけにもいかない

すべてかわさせてもらおうとしよう。

ドアを開け、黒板消しが落ちてくるが頭に落ちる前にキャッチする足元には転ぶようにか、ひもが仕掛けられていたが、引っかからずにすすむ

吸盤付きのおもちやの矢がこちらに向けて放たれたが右手ですべて受け止める（ちなみに左手には黒板消しとクラス名簿を持っている）バケツが落ちてきたが……さすがにこれは避ける……しまった、少し水がかかったな。

とりあえず黒板消しとおもちやの矢を教卓の上に置くが……

褐色色の肌をした子はこちらを見てキラキラした目で見ているし、この中で唯一俺と面識がある桜咲は俺と目が合ったとたん睨んできた。他の子は黙ったままだし

何か悪いことしてしまったのか？ 俺は？

「こらこら、この罨、また春日君、君たちの仕業なんだろう？
とりあえず不動君に謝りなさい」

「えーと…すいません、副担任が新しく来るっていうんで
あたしの中のイタズラ心に火がついたというか……不動先生、ホ
ントにすんません！」

双子！お前らも同罪だろうが！」

「え、えーと、不動先生！すいませんです

ほ、ほらお姉ちゃんも」

「すいませんでし…た？」

双子の姉妹…この二人は主席番号24番鳴滝風香と25番鳴滝史伽か
しかし…この二人を見ると龍亞と龍可が印象に出てくる。

「いいさ、別に怒っていない、席に戻れ」

「とりあえず不動先生、挨拶を…」

「3学期からこの2・Aで副担任をやらせてもらうことになった不
動遊星だ

整備士の仕事も兼任しているため教室にいることは少ないかもし
れないが……よろしく頼む」

「ちなみに不動先生にはこのクラスになれたりしてもらったために最
初の1週間程度授業見学をしてもらうことになっているからね
ではこれでホームルームを終了する」

タカミチさんがまとめると、俺は教室から出る

「どうだった？このクラスを見た感想は？」

先生としてやっていけそうかい？」

「ええ、学校に行ったことなんてなかったものでどのようなものかわかりませんでした」

大丈夫そうですよ」

ただ……ものすごく気になったことがひとつある。

出席番号10番、絡繰茶々丸

彼女は……ロボットじゃないのか？ゴーストのような人型タイプだろう、それもかなりクラスになじんでいた。

クラスメイトやタカミチさんが特に何を言うわけではないから触れないで置いたが……

この世界の技術じゃあのようなものを作るには不可能といってもいいはずだ。

クラス名簿に書かれている連絡先は……おそらくロボット工学部のことだろう

後で……見てみる必要があるな。

3学期から副担任として新しい先生が来るというのは学園長から聞いていましたか……

まさかあの時の人とは思いませんでしたね。

私には現時点であの人が味方と信じられない、すきを見て木乃香お嬢様を誘拐とかするために西が送ってきた者の可能性が捨てきれませんからね……

少なくともあの人がクラス内で面倒を起こそうものなら高畑先生が何とかしてくれるでしょうし、私は私の仕事をするだけです。

でも油断なんかまったくできませんね……

あのカードを使った召喚術、そして鳴滝さんたちが仕掛けた罠をたやすく避けるところからして……できそうですからね。

ちなみに、あの人のクラス内での印象はそれなりに良い方向のみだ

やはり鳴滝さんたちがあんなことしたのに怒らなかったのがよかったのかな？

「あの新しい副担任、絶対に強いアル！」

「今度手合わせしてもらおうネ！」

「こらこら、古菲殿、不動先生はまだ新任でござるよ？」

「まさか許してくれるとはね〜」

「お姉ちゃん……少し反省するべきだと思っんです……」

古菲さん……かかわらないでおこう

鳴滝さんたちは……私は反省すべきだと思いますね
さすがに濡れるようなのはちょっと……

「アスナ〜新しい先生、どう思うえ？」

「どうだっていいわよ、あのひと、私の好みの範囲じゃないし高畑先生がもっとクラスにいてくれたらなあ」

「あら、なかなかかつこいいお人だと思いましたが？」

やはりオジサン好きのあなたには理解なんてできないのかしら？」

「うっさいわね！！このシヨタコン！！」

「なんですって〜！！！！」

「（ふん、バカどもが……とりあえずサボるのだとかを注意しないんだったらどうでもいいさ）」

「（不動先生ノ視線…コチラヲ向イテイタモヨウマスターノ計画ノ障害ノ恐れ、アリ）」

明日菜さんと雪広さん…新学期から早々ですか
まあ、ケンカするほど仲がいい」という言葉もありますが…
まあかつこいい部類にあの人は…入るでしょうね。

「刹那、今日の午後8時に世界樹前広場に集合だそうだがあの新しい副担任の事を考えていたのか？」

「龍宮：別にそんなことを考えていたわけじゃない
それにしても世界樹前広場に午後8時に集合？
学園長からですか？」

「そうだよ、後でメールが来るだろうけどね」

アレについてだと私は思うがね

まあ、私としては依頼が増えることにはいいことなんだけどね

おそらく集まる内容はおそらくそれでしょうが……

それだけではないでしょうね

今思えば……何故副担任として2・Aにあの人は来たんだ？

第5話 先生への誘い…そして、出会い（後書き）

あとがきツッコミコーナー

近右衛門が黒い……

そうですね、しかし…何故悪役っぽいセリフは簡単に浮かぶのだろうか？

遊星はキャラぶれているんじゃないのかと心配になるばかりというのに…

ネギの住む場所が…

先生としてくるというのがわかっていてというのに何の準備もしていないというのはおかしいと思ったので…

どちらにしても結果は変わらないんですが

遊星が罫を…

黒板消しをやられたりしているのが想像できなかつたんです！！
そもそもチームサティスアクションのメンバーは運動神経がチートと言えますし

あとちなみにネギはまだ学園に来てすらいません

彼が来るのがおそらく2月後期辺り、この作品ではまだ1月辺りです。

第6話 図書館探検部との交流（前書き）

すみません、投稿遅れました。

言い訳をするなら冬休みの課題をやっていたという……

ちなみに、感想の受付をユーザーのみから変えました。

第6話 図書館探検部との交流

視点 遊星

タカミチさんから聞いたところ今日は午前授業で終わりらしい。

とりあえず今日は授業があるわけではないと言われてしまったので
どうしようと思っていたところ

『とりあえずクラスの間など交流を深めてみたらどうだい?』

と、タカミチさんに言われたので2-Aに戻ってきたが……

「だいたいなんで高畑先生がいいのか、美的センスを疑いますわ!」

「うつさいわね!あんたこそガキに対して変な目で見ていたりして
いるじゃない!」

「だまりなさい!この凶暴女!」

「このシヨタコン!」

…たしか神楽坂と雪広だったか?これはなにがどうなってこういう
ことになっている?

いつものジャックとクロウのいつもの言い争いと同じ感じがする…
とりあえず仲裁に入るか。

「おい、とりあえ「止めても無駄やで」ん?」

俺が仲裁に入ろうとしたのを止めたのは髪は黒髪で長く伸ばしてい
る子だった

…だめだ、名前が出てこない。

「あ、不動先生まだうちの名前わからへんねんな、うちは近衛木乃香っていうんや」

「助かる、近衛ということとは学園長の…」

「そつやで、学園長はうちのおじいちゃんや」

クラス名簿を見てみると…たしかに『学園長のお孫さん』とかかれていますな。

だがこういつてはなんだがぜんぜん似ていない、俺は父親によく似てると言われたが…
しかしなぜ仲裁をとめたんだ？

「木乃香…だつたな

何故止めたんだ？」

「あの二人、いつも自分の好みだとかでいつもああやって言い争いとかしているえ

止めたとしても先生がいなくなったらまたあなるえ」

「そうなのか、俺はまだここに来たばかりだからこういうクラス内の事は全く知らないんだ

こういうことは教えてくれると助かる

それと…今クラス名簿を見て気づいたんだが図書館探検部ってなんなんだ？

綾瀬と早乙女と宮崎もこの…部活？に入っているようだが」

「あ、気になったん？」

それなら今日の放課後、活動を見てみたらいいと思うえ、楽しい

んよ」

「わかった、放課後に行かせてもらおうとしてしよう
だが…どういわれようとあの二人の争いは止めないとな」

「がんばれえ〜不動先生」

そう言われ、俺はいまだに言い争っている神楽坂と雪広の方へ向かった。

少しこの学校でも楽しみが出来てきたな

「だいたいあなたのオヤジ趣味は何ですの!!! 本当に理解に苦しみますわ!!!」

「あんただってシヨタコンじゃない! そんな人には高畑先生の魅力なんてわからないのよ!」

「そこまでにしろ、周りも全員こっちを見ているんだぞ? 少しは二人ともおちつけ」

「「不動先生!?!」」

二人とも俺がいることにも気が付いていないぐらい熱中していたよ
うだな

それにしても神楽坂は…タカミチさんが好きなのか?
恋愛感情に関しておれはとやかく言えるわけではないが……

「すみませんでしたわ不動先生、少し熱くなりすぎていたようです」

「いいんちよ、あんた急に不動先生がいたことに気づいたからって
なにいい子ぶっちゃてるのよ!」

「二人とも、だからおちつけ
好みなんて人それぞれだ、どちらもとやかく言えるものであるわけ
じゃないだろう?」

「それはまあ…そうですね」

「それならこれで終わりだ」

そういうとチャイムが鳴り響いた。

タカミチさんが来たが、俺は教室の一番後ろで様子を見るといつこ
とになっているのでイスを持って向かう。

この時間やっていたことは…特に大したことはしなかった。

冬休み中の宿題の提出やプリントを配ったりしただけ

おれは特になにかしたわけじゃない

「それでは今日の授業は終わりだ、また明日ね」

「起立、礼」

さて、今日はもうおしまいか、明日から本格的に授業が始まるな
近衛がこっちに近づいてきたが…昼を食べてからにしてもらおう

「不動先生、いつ頃こっちにくるえ?」

「できればこの後職員室に戻るから昼を食べた後にしてくれると助
かる

そつちもお昼ご飯を食べるだろう?

出来ればそのあとに職員室まで呼んできてくれ

来る前にできるだけ仕事だとかを片づけておく」

「わかったえ、ほいじゃあまたなあ！」

さて、職員室に向かうか…ん？職員用にもらった携帯電話にメールが来ている

学園長からか…今日の午後九時に世界樹前の広場に集合？

デュエルディスクとやらとバイクが変わったカードを持ってきてくれと、メールには書かれていた。

視点 木乃香

「木乃香、本当に歓迎会をするの？」

「大丈夫やってアスナ、不動先生には教室の準備が整うまでうちらに付き添って図書館島にいらつえ

それよりも買い出しは任せたで？それと準備おわたらメール頼むわ」

「まかせなさいって、2・A全員が協力してくれているんだから2、3時間ぐらいで用意できるわよ」

「んじゃ、ゆえ、パル、のどか、食堂棟でお昼食べてそのあとで不動先生呼びに職員室行こうえ」

「本当に図書館島まで誘うんですかー？」

私、先生としゃべれそうにないんですけど…」

「大丈夫だって、こっちの話にペースを持っていければさ不動先生だってこっちに向けて心開いてくれるって！」

「私はそう思えないです」

あの人がどういうものに興味あるかなんてわかりませんからね」

のどかは男性と話すの苦手やしなあ

でもゆえが言っていることも確かになって思える

うちが不動先生に見えた第一印象って無口そうな人やなあって思ったからなあ

…うちらあの人とうまくコミュニケーションとれるかなあ。

…何か心配になってきたで。

「とりあえずいつもの図書館探検部の姿を見せればええよなんとか用意が終わるまでうちらが粘ればええだけやしとりあえずクラスの方は任せただで…！」

みんなおおー！！という声とともに作業に取り掛かってくれとるほな、こちらは食堂棟でお昼食べにいこか

……もう昼も食べ終わってこちら図書館探検部組は職員室の前にお
る。

クラスの方の準備はまだ4分の1程度しか終わっておらずみんな休
憩しとった。

準備途中のクラスを見たりされたらビックリ？いやサプライズやつ
たけ？それにならんからなあ。

4人の中で話したことがあるうちが職員室の扉をノックし、ドアを
開けた。

「すみませんー

2-Aの木乃香ですー不動先生ほおれへんでしょうかー？」

ん、おった！不動先生！

明日の授業の準備をしとるんやろうか？数学の教科書らしきものが
見える。

「ん、もうそんな時間か

では図書館探検部というのを見せてもらおうか」

不動先生とこちらは図書館島へと向かったけど

不動先生は図書室で活動しているものだと思っていたらしかった。

「では、木乃香たちはその図書館島というところで活動しているのか？」

「そうやで、図書館島っていうのは……ゆえ、説明頼むわ」

「はあ、図書館島というのは明治の中頃に学園の創立とともに設立されたもので

世界各地から戦火を避けるべく色々な本が貯蔵された場所です

世界でも最大規模の巨大図書館であって、現在ではその全貌を知る人はいません

地下にも増改築が繰り返されていて、本の盗難を防ぐためにか罫が仕掛けられている場所もあるようです

そこで、それを調査するために麻帆良大学の提唱で発足されたのが……

私たち、図書館探検部なのです」

ゆえが説明する、しかしなんでこういうことだけはすぐ覚えることが出来るのかなあ

勉強もそうしておけばバカブラックなんて呼ばれへんですむのに

……無理か、ゆえは勉強が嫌いやからなあ。

「ちなみに、中・高・大の合同サークルやで」

「そうなのか、あまり俺はここについて詳しくないからな…

俺がこの学園の教師になるのなんてつい3日ほど前に決まったことだからな」

「そうなん？」

もっと前に決まるもんやないの？」

そうして話しているうちに、図書館島に着いた。
クラスでは今頃、準備が着々と進んでいるんやろつなあ

「ここが…図書館島か」

中を見て、不動先生も驚いたらしい、興味津々な目で辺りを見回している。

やっぱここに連れてきて正解やったわあ。

これなら放っておいても勝手にここにいてくれるかな？

「じゃあ不動先生、うちたちは部としての活動をするんやけど……
どうするん？」

「……ああ、俺はこの本を自由に見て回らせてもらう
科学や機械系の本を中心に見てくるから帰る時ぐらいになったら
教えてくれ」

「わかったわ不動先生

でも、地下3階より下は罨だとかがまだいっぱい残っとるらしい
から気を付けるべきやって先輩が言っとったから！」

……意外と本とか好きなんやなあ、不動先生つて。
ちよつと意外やわあ。

「意外でしたねー不動先生つて

私はもつと別な物だとかが好きだと思っていたんですけどー」

「たしかにね、私の漫画だとかも見えてくれるかな？」

「見てくれはするでしょうけど、絶対に好みの範疇には入らないと思うです……」

ゆえ、それはうちも思った。

不動先生はおそらく文学系が好みやとうちは思っわ。

視点 遊星

たしかにここには大量の本があるな……さすがに図書館“島”と言われるだけある。

懐かしいな、子供だった頃にマーサハウスで本をあさり、D・ホイールの技術を学ぼうとしていたころの思い出が流れ込んでくる

しかし……この世界の技術とかを確かめようと思って色々な本を確かめてみたが……おそらくこの世界の科学技術は俺たちの世界よりも数段下だろう。

……だれかこの世界に技術を提供している俺のような人間がいない限りあの絡繰茶々丸のような精巧なロボットは作れないはずだ。

まさかもうこの世界はアポリアのようなイリアステルの人間が修正がくわえている世界なのか？

……しまった、さすがに調べることに熱を入れすぎたか
さすがに木乃香たちの様子を見てくるとしよう

ここには畏だとかが仕掛けられていると彼女たちは言っていたからな。

色々と4人を探し回っていると……

あれは…宮崎のどかだったか？彼女が自動販売機で飲み物を買っていた。

「すまない、3人はどこに行ったか知っているか？」

「え！？ふ、不動先生！？え、えーと…その…こ、こっちは…」

宮崎は…人と話するのが苦手なのか？

あまり話をしたがらない子と無理やり話をしようとするのも酷だ。
俺も……スターダストをジャックに奪われてから取り戻すまでは他の無用な言葉を口にしないと誓っていた時期があったからな……

宮崎の後をついていくと…早乙女と木乃香がテーブルの上で何かをしていた。

あれは…デュエルモンスターズじゃないか！

「ほい、アルカナフォーサーXXXXIITHE WORLDでがら空
ダイレクトアタック
きのパルに直接攻撃や！！」

「あーもう負けた！！相変わらずそいつの効果強すぎ！！」

ターンスキップされたら何もできないじゃん！」

「ふふふ、うちの勝ちやな！」

「って不動先生！？何しに来たん？」

「ああ、そつちの様子を見に来ただけだったんだが…」

「…デュエルモンスターズをやっていたのか」

「その様子だと不動先生もやったことがあるんですか？」

「ああ、だが今はデッキを寮の部屋に置いてきている」

「（お！お！まさかの共通点発見！？不動先生の目が子供のよう
に輝いている……気がする）」

「ん？この黒いカードは何だ？」

俺が手にした一枚のカード、それは通常モンスターでも効果モンス
ターでもなくシンクロモンスターのように白いフレームでもなく、
ダークシグナーが使っていたダークシンクロモンスターとも違う、
あのカードのフレームは灰色だった。

この黒いフレームのカードは…いったいなんだ？

「それはエクシースモンスターです」

「エクシースモンスター？」

聞いたことがないな…この世界で存在するカードなのか？

レベルの表記も右からなのに対してエクシースモンスターは左から
になっている。

ここら辺はレベルがマイナスであるダークシンクロモンスターと酷似しているな。

「エクシーズモンスターとは基本的にはエクストラデッキに存在するカードでレベルが同じモンスターを使って召喚するモンスターです。素材となったモンスターはエクシーズモンスターの下に重ねるものとし、基本的にはエクシーズモンスターは素材として扱ったモンスターをオーバーレイ・ネットワークと言い、それを取り除くことによって強力な効果を発動することかできます」

それと、エクシーズモンスターにはレベルが備わっていません。シンクロというものになっています

ちなみにエクシーズモンスターを召喚する際、モンスターを重ねることをオーバーレイといいます」

シンクロの亜種に近いようなものが、これらのカードは。

「なるほど…このモンスターはそういうものなのか…他に変わったのはあるのか？」

「エクシーズの他というと…儀式・融合程度しかおらんで？」

「いや、フレームが白いモンスターとか…」

「確かになーエクシーズは黒いから、そろそろ白いのが出るんやないかってゆううわさはあるんやけどなー」

この世界では…シンクロは存在していないのか？

となるとチューナーも存在していないということになる。

『t r u u u u u u ……』ん？誰かの電話が鳴っているのか？

「あ、ごめん、うちの携帯や、少し外させてもらっえ
もう準備できたん！？わかった、呼んでくるえ
不動先生、少しこちらに付き合ってもらってもいいかえ？」

「ああ、別に問題はないが……」

「じゃ、決まりだね」

第6話 図書館探検部との交流（後書き）

あとがきツッコミコーナー

遊星が教室に戻ってきたときの時間

明日菜と雪広は前話桜咲視点でのけんかの続きをしています

遊星のサテライトでの時間？

遊星は子供のころ、色々なことしてきたということにしています

ちなみに遊星が無用なことを口にしないというのはTF4のマーカーなし遊星のシナリオで言っています。

確か「みんなの夢を取り戻すまでは無用なことは口にしないと誓っていた」だったような……

木乃香のデッキはアルカナフォースなのかどうか。

彼女のデッキはまだ半々というところです。アルカナフォースは使わせますけどどういうタイプにするのかまだ決めていません。

ちなみに、もう使わせるデッキを決めているのは、アスナ・桜咲・龍宮・小太郎・超

・エヴァンジェリン・茶々丸・のどか・雪広、このあたりですかね。

ちなみに使うデッキとして迷っているのとして、夕映・木乃香・

ハルナ・ネギ・楓・朝倉・がいます。

それ以外は、まだ決めていません。

木乃香がアルカナフォースを使う理由

木乃香って確か占い研究部の部長ですよ？

占い「当然正位置い！！」のアノ人 アルカナフォースの方程式が一瞬で出てきました。

キュアバーンも出ましたが、龍可と被るので……

ネギま世界ではエクシーズはあります

エクシーズについての説明……あつてるよね？

第7話 明かされた魔法（前書き）

今回は短めです

あああああ……！！……デュエルを書きたい！！
でもそこそこの後の予定なんだよなあ

第7話 明かされた魔法

視点 遊星

4人に連れられて来た場所は…2-A！？
何故ここに……？

「さあさ、不動先生、入ってえな」

困惑する俺の意思などなんのそのという感じに4人は俺を教室の中に押し込んだ。
中にいたのは4人を除く2-A生徒全員そして手にはクラッカーを持っている。

「……………不動先生、2-Aによっこそ！……………」

クラッカーの音とともに、言われる。
どうやら俺のクラス就任をこのクラスの子たちは歓迎してくれるようだ。

正直言つて……胸が熱い。

「ほらほら、主役なんだから真ん中に行つて！」

誰かの声に言われるがままに、真ん中のテーブルの席に座ると、パティのように騒がしくなりはじめた。
とりあえず、テーブルに置かれている飲み物とお菓子を食べながら、俺はこの歓迎会を楽しんでいこう。

「（そういえば木乃香、図書館島で不動先生と何やってたの？）」

「（ああ、最初は個別で行動になっていたんやけどな、途中からデュエルモンスターズの話になったりしてな

結構盛り上がったで）」

「へえ〜不動先生もデュエルモンスターズをやったりするんだ、ちよつと意外かも」

「不動先生、チャオパオス超包子特製肉まん食べるアルか？」

お団子ヘアーと三つ編みの髪型をした子が話しかけてきて、肉まんを勧められた。

名前は確か…超だったな、チャオと読むのか。

「ああ、いただく」

もらった肉まんを食べてみたが…美味しい皮だとかがもちりしていてしっかりしている。

「不動先生、どうだったアルか？」

そういえば整備士も兼任してるて聞いたけれど機械いじりだとかひよつとして得意だったりするか？」

「ああ、そうだが…そういえばロボット工学部だったか？超は」

「そうネ、こんどいつしよにロボット談議に花でも咲かそうヨ」

「ふ…悪くないな

あいつを除いてそんな話をしたことなんてなかったからな…」

「あいつ？まあいいネ

楓！肉まん食つかネ！」

「やあ不動君、歓迎会を楽しんでいるかい？」

超と話し終えた直後、急に後ろから話しかけられたのでふりかえった。

そこにいたのは…

「え？ああ、なんだ、タカミチさんでしたか」

「ははは、今日の主役は君なんだよ？

もっと楽しんだっていいじゃないか、一人でたそがれていて何もしないでいるなんてもつたいたいじゃないか」

「え…？そんな感じに見えましたか？

少し考えていたんですよ、昔の事だとかを…そして俺のこれからを…」

「君ってどういう世界にいたんだい？

どうやら、相当複雑な事情があるようだけれど」

「俺がいた場所というのは…そうですね俺と一緒にあったカードがありましたよね？

あれが相当覚えていました。色々なことがあった…

戦いの日々、そう言うといいかもしれないね」

ダークシグナー・ゴースト・イリアステル…
思えばサテライトを脱出したあの時から俺の戦いが始まっている
のかもしれない

「たとえばどんなことがあったんだい？」

「簡単に言えば…ある一枚のカードによって死にかけたこともある
ぐらいです

ふ…冗談に聞こえましたか？」

「……信じるといっ方が難しいよ」

そつだろつな、この世界では闇のカードなんて存在しない世界だ。
俺だって…赤き龍の痣や今まで起きたことがなければ信じないだろ
う。

さて…もう5時か

「みんな、そろそろ帰るべき時間だ

まだ物足りないかもしれないが、先生にも事情がある」

「まだ物足りないよー」だとか「えー!!」という言葉もあったが
基本的には片づけをし、デュエルフェイス全員下校した。

俺もいったん寮に戻り、決闘盤とカードをとりに行き、世界樹前に
行くつう。

世界樹前に…カードと決闘盤デュエルディスクを持って向かい、たどり着いた。
10人ほどの人がいる。その中には先生として挨拶した人もいた。
学園長、タカミチさん、そして生徒のはずの桜咲、絡繰、龍宮もいた。

全員がこちらを見ている…

「不動君、とりあえずこちらに来てくれ

先ほども言ったが紹介しよう

不動遊星君、2・Aの副担任であり、数学を担当してもらい、学園の整備士も兼任してもらった

そして…先ほど言ったように彼は異世界人じゃ」

学園長！？簡単にそんなことを言ってもいいのか！？

事情を知っているタカミチさんとあなた以外にそんなことを急に！？

「いいんですか？そのことをばらしても？

この中には2・Aの生徒もいるんですが…」

「心配は無用じゃ不動君、隠し事は無しということじゃ

君にも話しておかねばならぬこともあるしの

この学園の…裏についてじゃ」

「この学園の…裏？」

「不動君、君は魔法と言えるものを見たことがあるかね？
もしくは、それに準ずるものでもいい」

魔法？ダークシングナーやイリアステルとの戦いであったダメージが
現実になったりするものだとかは…
赤き龍の力も魔法と言ってもいいものだしな。

「近いものなら…しかし、それを言うなら俺のこの決闘盤デュエルディスクでのモン
スターの実体化も同じようなことが言えるのではないだろうか」

「ふむ…たしかにそうじゃろうな
しかし…この世には実際に存在するんじゃないよ…魔法というもの
がな」

魔法が存在する？
ということはもしや…

「ここにいる人たちは魔法使いということですか？
そして…学園長、あなたもそうということですね？」

「ふむ、話が早くて助かる
ここにおけるのは…魔法先生、魔法生徒、その関係者ということじ
や、全員ではないが
言うておくが全員が魔法を使えるというわけではないぞ？
たとえばじゃが、タカミチ君は何故か魔法を使うことが出来ん」

「なるほど…俺の中でもこの学園にはたくさんの疑問と言えるもの
がありました

とりあえずそのことには言わないでいましたが…
たとえば言うなら絡繰とかですかね…彼女はロボットなのでしょ

う？」

「ソウデス、私八葉加瀬聡美様や超鈴音様ニヨツテ作ラレタ
マスターノ従者デス、魔法ノ力ヲちから動力部分ニ使用シテイマスガ」

絡繰はそういうことだったのか…だとしたら科学技術が他と比べて
断然違うこともうなずける

しかしなるほど…ここは魔法使いの学園ということか
本当のことを知っているのはごく少数ということと見える。

「隠し事をせずにに本当のことを教えてくださった事は感謝して
います

しかし…魔法と言っても俺にはどういふものなのか実感がわきま
せんが」

「ならば、身体に直接教えよう…！」

その言葉と共に、褐色肌の先生が俺に向けて指先から風の矢みたい
のをはなってきた。

俺はカードをとっさに5枚引き、1枚を使用した。

「なっ…くず鉄のかかし…！」

「何！？なるほど、それが学園長の言っていたカードを実体化させ
る力か！」

「ガンドルフィーニ君…！やめるのじゃ！」

「しかし学園長！私は先ほど言ったようにこのような怪しい人物を
この中に入れておくのは危険です！」

いつ未曾有の事態を引き起こすか…

不確定要素はすぐにも排除しておくべきだと…！私は！この学園のためにっ…！」

なるほど、あの人の起こした行動は独断のようだ。

確かに突然に事が進みすぎている、いきなり異世界人をこの学園に招き入れているんだ。

注意するなというのが無理だろう。

それに魔法も実際にあるということもわかった…俺の力も周囲に示すことにもなつたしな。

「ふむう…しかしのう…」

今のような事態は避けてくれんか？

不動君は何もこちらに危害をくわえるようなことは何もしていない
これから彼にも協力してもらおうと思つてるのじゃ」

「協力？何か事情が有るようですが…」

「ふむ、協力してもらいたいことというのは…」

君にも、この学園を守るための戦いに加わってほしいのじゃよ
彼らと共にな」

「ここから先は僕が言おう」

実はここ半月前にこの大きな木…世界樹が当然発光するということがあつたんだ

特にその発光したいでは被害は発生しなかつただけど…

2、3日後にはこの学園に突然悪魔らしき者たちが現れるようになつたんだ

…君がここに来たときに戦つたらしい奴らだよ

そこで僕たちは、学園を守るためにということ、シフト制で見

回りと悪魔討伐をしているんだ

君は、戦うための力を持っている

そこで、君にもこの戦いに参加してほしいということさ

無論、おそらく命を懸ける戦いになる、無理強いにはできない
「

なるほど…あの時のマッド・デーモンやランサー・デーモンはそういうことだったのか…

タカミチさんの言わんとすることはわかった。

戦力になるような力を俺は持っている。

「…わかりました

俺も、その悪魔討伐に加えてください」

「うむ、その言葉、待っておったぞ不動君

それならば、今日から見回りに加わってくれ

しかし、先ほどガンドルフィーニ君が言っておったが君に強い信頼を注ぐわけにはいかん

桜咲君、悪いが君と不動君を同じペアとさせておく」

「わかりました、学園長がそうおっしゃるのなら私はそれに従わせてもらいます

しかし、お嬢様になんらかの危害を加えるような存在と私が判断した場合は…切って捨てます」

桜咲は持っている刀を俺に向け、言い放つ

だが…お嬢様とは誰の事だ？

おそらく監視役という任も桜咲は受け持ったという意味なんだろう。

「ふむ、では2人には悪いが見回りの当番じゃ

これから見回りを二人には行ってもらおう

ちなみに当番の交代は3日後じゃ、では解散と…

おおそうじゃった、そうじゃった

不動君、君のバイクが変わったカードを出してみてくれんかね？」

俺はスーツのポケットからドラゴンヘッドが描かれたカードを出す
が…

先生は皆驚いている「仮契約カード!？」とか言っている人もいた。

「それは仮契約カードというものでな…」

とりあえず、手に持って、アテアット「来れ」と言ってみてくれんかね？」

「かまいませんが…アテアット来れ」

俺が言うと、カードは光り目の前に俺のD・ホイールが出現した。

これも…魔法の力なのか？

「やはりのう…ちなみにカードに戻りたいときは、アヘアット「去れ」と言えば
消えるぞい

それは人と人の契約によって出現するカードなんじゃが…

使えるのならば問題あるまい、しかし、わしら以外…つまりは魔法と無関係の人間以外の前でそれを使ったり、教えたりしてはいかん

そのような事が起きたとしたならば、わしらは君の記憶を少し消したりせねばいかなからのう」

「わかりました、肝に銘じておきます」

「ではこれで本当に解散とする

明日から本格的に授業も始まったりする、各々ゆっくり休むように」

第7話 明かされた魔法（後書き）

あとがきツツコミコーナー

歓迎会がなんか微妙な感じで…

そうなんですよね…ホントに微妙

ネタがそんなに思いつかなかったというのがでかい

世界樹の集まりにいた人って？

原作でいた魔法使いが大体いたと考えてください

しかし、触れていなかったような人はいません

エヴァとか…春日とか

なんでエヴァはいないの？

エヴァなら面倒とか言っただけじゃないと思いました。

代理が茶々丸ということですよ

ちなみに春日がない理由としてはまだ見習いと言えるような存在だからです

戦闘向きでもないし、いたところでも何かが変わるわけじゃないんで

第8話 信頼結ばれつつ夜 悪魔を打ち払え！ マックス・ウォリアー！！（前

多少刹那の性格を疑心暗鬼にしすぎているような…

遊星が別次元の人間だとすればこれぐらいすると思っただんですが

…

第8話 信頼結ばれつつ夜 悪魔を打ち払え！ マックス・ウォリアー！！

視点 近右衛門

ふむ…話がすんなりすすんでくれてよかったわい。

これでわしらの戦力も少しは増えた。

龍宮君が不動君と話しているようじゃが…

おそらく探りかの？

不動君と桜咲君はお互いに話し合ったりもせぬし…どうしたもんじやろ？

こちらとしても帰りたところじゃが…

「さて、高畑君、2人には気づかれないように見守っておいてくれるか？

相手はどこから来たのかもしらん悪魔じゃ、保険はかけておくに限る」

「ははは、僕は保険扱いですか

いいでしょう、先生としての後輩と生徒の監視、了解しました。」

さて…ネギ君も2月の終わりごろには来るし、そろそろこの戦いにも決着をつけたいところじゃが…

敵の本拠地もわからんことにはのう…

「学園長、マスター二何力伝エテオク事ハアリマスカ？」

「茶々丸君か…エヴァには伝えておいてくれ

不動君の事、そしてもっと真面目に学園の警備の仕事をせいとな」

「了解シマシタ

マスターニハソノヨウニ…」

まったく…エヴァにも困ったもんじゃわい

さて、わしも帰って寝よう明日からまた忙しい生活が返ってくるからもう

視点 遊星

俺と桜咲は何も話さないまま世界樹広場に沈黙が流れている。
ちなみにほかの生徒、及び先生には挨拶などをし、帰っている。

先ほど龍宮から聞いたが「刹那はあなたを本当に切りかねないから
気をつけておいたほうがいいですよ？」と、言われた。

彼女はおそらく、責任感が強く、他人の期待に答えたいというよう
な意志が強いのだろう。

だが、このまま沈黙が続いているわけにもいかない、仕事だしな。

「桜咲、行くぞ、よく悪魔が現れる場所というのはどこかわかるか
？」

「はい、では…あなたと私が出会ったあの森に行きましょう、あそこでの目撃は多々あります」

「わかった…乗るか？」

「どういう意味ですか？…まさか、その変なバイクで二人乗りでもしようとも言いたいのですね」

私もあなたを全く信用していない者なんですよ？わざわざ背中を向けるとはどういうつもりですか？

何かねらいがあるんでしょう？小細工なんかしない方が身のためだと思っただ方がいいですよ」

桜咲は剣を構え、こちらを睨みつけている

俺は完全に悪役か…

「変なバイクって…あつさり言ってくれな

これはD・ホイールだ、それに、俺はお前に別に何かしようなんて思ってもいない

ただ単に目的地に行くまでに歩きで行くのが疲れると思ったただけだ、ねらいなんて何も無い

それに…俺はお前を信頼しているしな、仲間として」

「っ！！私は…私はお嬢様を守るために仲間なんて作りません、邪魔になるだけですから

…ですが、あなたと共に見回りをし、悪魔を打ち払う、というのが私の仕事です

そのD・ホイールとかに乗りましょう、こうしている今にも悪魔は出現しているかもしれませんから」

「わかった…振り落とされるなよ」

そうして、俺と桜咲はあの時の森へとD・ホイールを走らせた。

D・ホイールのスピードはこの世界に来た時と同じように芳しくない
やはりモーメントの回転数が少ないというのがな…

このままではシンクロもすることが出来ない、どうするべきか…
しかし、それよりも前に桜咲に聞くべきことがある

「桜咲、悪魔がこの学園に狙うようなものというのに心当たりはあるか？」

「急になんですか？しかし…いくつか思い当たるのはあります

そもそも、世界樹から出ている魔力が原因というのが私たちの見
解ですが

ですがいろいろと腑に落ちない点もあります発見される悪魔が私
たちが知りえないものだから…

ほとんど見つかる時間が最初を除いてほとんど同じ時間と場所と
いうのも」

「最初を除いて？…どういう意味なんだ？」

「最初の悪魔襲撃はこの学園に張られている結界が感知しました
しかし、その後は結界が感知できずに、突然のように現れるよう
になったからです

だからこそこうして、見回りなんてことをやっているんです」

結界が張られていることは今知ったが…当然現れるようにだと？

まさかと思うが…マッド・デーモンにランサー・デーモン…いや、そんなことは考えないでおこう。

もう森が近くまで見えている。

俺と桜咲はD・ホイールから降り、「去れ」^{アヘアット}と言い、カードに戻した。

それなりにいい機能だ、いつでもD・ホイールに乗ることができる。

「桜咲、悪魔が出る時間というのは…

もう過ぎているのか？」

「いえ、それどころか今から1時間前後が悪魔の目撃が多い時間帯です

発見がされていない日もありますが…ほぼ毎日です

不動先生、あなたも本当に戦われるんですか？」

「ああ、この学園を守るためにもな

それに…教え子を戦わせるわけにもいかないだろう？」

「あなたに守ってもらわなくても自分の身は自分で守ります、大丈夫ですので

それよりも不動先生、やはりそのカードと機械で戦うんですか？」

「ああ、このカードたちは俺にとって大切な‘仲間たち’だからな

「そんな4〜50枚のカードが仲間？

まあいいでしょう、私の邪魔だけはしないでくださいよ」

桜咲…そう言っているが寂しさがにじみ出ているような感じがするぞ…

お前は一人でいることが本当はいやなんじゃないのか？
他者との絆を心の奥底では求めている…俺にはそう感じた。

「桜咲、お前は本当は…」

「ゴアアアアアツツ！！！」

「何！？」「来たか…」

森の奥から何かの生物が雄叫びを上げるような声がした。

俺と桜咲は戦闘準備を整え、森の奥へと入った。

その先にいたのは……

紫色の身体にガチガチの筋肉をもつモンスターだった。

俺達を威嚇するかのようには咆哮をあげている。

「出たか…桜咲、俺が援護しながら攻撃に移る

桜咲は…」

「いいえ、結構です

私が……切り伏せますので！！！」

桜咲は俺が止めるのも聞かずモンスターに向けて剣を抜き、突っ込んでいった。

だめだ！無謀すぎる！

しかし、桜咲も戦いの実戦経験があるのだろう、そして、2本の右手で次の攻撃をしようとしているのだろう、速さでモンスターのパンチをかわすと飛びかかって切ろうとしたが…

モンスターとは違う別方向の茂みから火球らしき物体が桜咲に直撃し、木にたたきつけられた。

「桜咲！大丈夫か！？」

くっ…もう1体いたということか…」

「心配…される言われは…あり…ません

少し油断した…だけですので」

桜咲はもとも部外者だった俺に助けてもらうのが嫌なのだろう、持っていた剣を杖のようにし、立ち上がった。

しかし、不意を突かれた攻撃を受けたので、ダメージはそれなりに受けている。

そして茂みから姿を現したのはなぜかアメリカンフットボールのヘルメットと防具をつけた悪魔

右手、左手が2本ずつあり合計4本だ。

しかし、右手2本には次の攻撃を行おうとしているかのように新たな火球が握られていた。

「くっ…カードたちよ！俺に…誰かを守ることが出来る力を貸してくれ…！」

『デュエルディスク

決闘盤 バトルモードスタンバイ』

俺はカードを6枚引き、1枚のモンスターの名を叫んだ。

「速攻のかかし”の効果発動！桜咲を守れ…！」

くず鉄のかかしとは違う背中にブースターらしきものを背負ったかかしが桜咲の前に立ちはだかり、盾となった。

もう一体の悪魔も俺に対してこぶしを振り上げ、殴りかかろうとしたが…

「ふっ…それはこちらで受ける！トラップ発動！“くず鉄のかかし”！！」

俺はセツトしたくず鉄のかかしでその攻撃を受け止めた。

破壊されてないだけあってやはりくず鉄のかかしは固いのだろう、よろめいた後、モンスターもパンチを繰り出した右手にフーフー息を吹きかけている。

俺は桜咲の前に立ち、尋ねた。

「大丈夫か…？桜咲、少し下がっている…こいつらは俺たちが倒す
来い！」マックス・ウォリアー”！！」

視点 桜咲

くっ…もう一体隠れていたとは…

油断した…炎を纏った何かをぶつけられ、爆発したらしい
気をとっさに防御に回したことによってまだ動けるけど…まだ少し
ふらつく。

やはり私はまだ未熟者だ…そう落胆しているときまたさっきの火球
が私に向けて投げられた。

くっ！やられる…！

目を閉じ、痛みを受ける覚悟をしたが…

「速攻のかかし”の効果発動！桜咲を守れ！！」

え…？

その言葉で目を開けると目の前には魔法先生の攻撃を防いだのとは
別の”かかし”が私を守ってくれたらしい。

先ほどの言葉から、このかかしは不動先生が使役しているものだろ
う。

なぜ、私を助けてくれた？今まで私は先生を信じきれず、敵対心を出していたというのに、なぜ？

…分からない、私ならそんなことをせず、注意が自分からそれている敵に切りかかっているだろう。

そんな私の疑問を大きくするかのように不動先生は悪魔に立ちふさがるように私の前に立った。

「大丈夫そうだな…桜咲、下がっている、こいつらは…俺たちが倒す来い！マックス・ウォリアー！！」

俺たち？そういえば言っていた…このカードたちは仲間だと現れたののような矛を持ち、マントを風でたなびかせていて、数珠を首にかけていて、僧兵のような姿をしている。

おそらく”マックス・ウォリアー”って名前なんだろう。

しかし、人ではない機械のような顔と身体だった。もしかしてあれもモンスター？
マスターである不動先生の命令をこなすべく、紫色の悪魔に突っ込んだ。

「攻撃だ！マックス・ウォリアー！スイフト・ラッシュュ！」

目にも止まらない速さで刺又で突きを繰り返し、紫色の悪魔に攻撃している。

悪魔は腕を交差させてガードしながらパンチを繰り返している
どちらも一進一退といったところだ。

「互角か…なら強化するまで！」

“ワン・フォー・ワン”発動！手札のモンスターをコストに…現

れる！

“ブースト・ウォリアー”！！」

現れたのは赤い男、ところどころに機械を施している。

そして青いオーラのようなものをまとい、そのオーラは“マックス・ウォリアー”にも覆われた。

そして、一進一退だった戦いは“マックス・ウォリアー”が押し始めた。

おそらく、先ほどに呼び出したモンスターの出したオーラが強化をさせているのだろう

強力な一撃が悪魔に入ると、倒れ、消滅した。

…もう一体の悪魔はどこに行ったんだ？

いた！おびえるような様子にいるが、逃がさない！

私は夕凧を抜き、切りかかった。

「逃がすかーっ！！」

火球をこちらにはなつたが、避けながら突っ込み、正面から一刀両断した。

少し危なかったけど…とりあえず大丈夫だった。

「桜咲…もう心配なさそうだな」

不動先生は少し笑いながらこちらに向けて手をさしのばしてきた。

「どうした？」といった様子でこちらを見ているが…

「…どういう意味ですか？その手は」

「どついつ意味って…ただ単に握手だ
これからもよろしく頼む」

「いいでしょう、あなたには守ってもらいましたし」

私は差し出された不動先生の手を握り、握手した。

「さて、まだ見回りも終わっていない、後はどの辺りをまわればいいんだ？」

「ここからは……………」

私たちはいったん森から出てあのバイク…いや、D・ホイールに乗り別の場所に走り出した。

「これで今日の見回りは終了ですね」

「そうなのか…では学校でまた会おう、明日から授業も始まるしな早く帰って寝た方がいい」

「では、まだこの時間は電車が出ているので」

私は寮に向かう電車の駅まで歩きだした。
不動先生のD・ホイールも先生用の寮に向けてもう見えないところ
まで走っていった。
結局言えなかったな：“ありがとう”と。

視点　　????

ふう、あいつが帰ってこないと暇で暇でしょうがない！
頭が重い感じもするしクシャミも出そうだ：“これだから冬と春は嫌
いなんだ。
風邪がぶり返してくる。
ん？外から少し音がしてきたような：“やっと帰ってきたか！
待ちくたびれた、確かなぜか今頃になつて集会をしているんだつたな
この寒い中ご苦労な事だ、私はサボってやったがな！！

「マスター、タダイマ戻リマシタ」

「遅いぞ茶々丸！何を話し合っていた？無駄に長いぐらいだ、そこ
まで重要な事でも話しているわけでもなかるうに……」

「マスター、報告ガアリマス、不動先生ハ異世界人ノ模様
ソシテ学園長ガ言ウニハ『もつと真面目に仕事せい!!』ダ、ソ
ウデス」

「は？どういうことだ？じじいが言ったことなどどうでもいいが
最初にお前はなんといった？」

「不動遊星ハ異世界人ノ模様」

「だーからそれはわかっているわ!!…もういい、録画とかをして
いるのだろう？」

それをさっさと見せる」

はあ…茶々丸は少し融通がきかなくて困る、まだ二歳児だが機械と
魔法の結晶なのだお前は（ハカセ曰く）

もう少しマスターに気を利かせたりしたっていいんじゃないか？

もう愚痴を自分に言い聞かせるのも疲れる。

パソコンに自分の撮った映像データとやらをつなぎ、映像を私に見
せた。

『“くず鉄のかかし”!!』

ほう、カードを実体化させる力か…しかしあれはデュエルモンス
ターのカード、どのように実体化させたのか分らん
まさかあの腕に着けている機械で出来ているのか？
だとしたら面倒だ、機械はそんなに得意じゃない。

しかし…異世界…この旧世界でもなく魔法世界にも属さない者が…
フハハハハハハ!!!久しぶりに興味がわいた!!!
今度血を吸いに行く対象が増えてくれたものだ!

ナギの息子が来る時まであと1ヶ月と少し、メインディッシュまでの前菜としてちょうどいいではないか！！
どんな血なのか…楽しみだ。

しかし、今はこの風邪気味の状態を何とかしなければな、何とも気分が悪い。

「マスター、早く寝ナイト体調が悪化する可能性大です」

まったく、うるさいロボットだ。

第8話 信頼結ばれつつ夜 悪魔を打ち払え！ マックス・ウォリアー！！（後

あとがきツッコミコーナー

刹那の性格が…

活動報告で書いていますが性格悪化の一部です、このことに関してはできるだけ言わないでもらえると…

遊星に吸血鬼襲撃フラグが…

そうですね、どうするか迷っています

さて、どうしたものか…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5536z/>

麻帆良に輝く光さす道

2012年1月14日02時19分発行